

石田農園・いきいき畑の大和芋「まいべえ」2014年産

生産者：石田喜一

○石田さんの生産方針○	ちばエコ農産物の化学合成農薬、化学肥料の使用上限(大和芋)	
「ちばエコ農産物」に認定される化学合成農薬、化学肥料の使用基準以下特に化学合成農薬は「必要最少」使用にとどめ、環境に優しい、安心して購入していただける大和芋を生産する。	化学合成農薬(基準:使用成分×回数)	11回(普通栽培20回)
	化学肥料(使用量=窒素成分量 kg/10a)	10.5kg
	☆堆肥の鶏糞は目安量ですが10a当たり500kg設定されている	

栽培の手順	作業内容	肥料・農薬等使用履歴	備考
<p>(1) 土壌育成</p> <p>播種：7月上旬 開花：11月 梳き込み：11月</p>	<p>前年にマメ科・クロタリアを栽培・初冬土壌に鋤きこむ</p> 	<p>○クロタリア：センチュウの防除効果＋開花時に梳きこむことで緑肥効果が得られる</p>	<p>(クロタリアの効能) クロタリアは、ネコブセンチュウに強い防除効果がある対抗植物。特に芋類のネコブセンチュウの抑制効果が認められている。</p> <p>*緑肥：生のままの草木の葉などを土中に鋤きこみ肥料とする。鋤きこまれた植物体は土中で微生物に分解され養分として作物に吸収される。(日本大百科全書)</p>
<p>(2) 種芋作り、土壌作り 2014年1月～4月</p>	<p>種芋：収穫後洗浄し大和芋をカット、低温乾燥後低温保管</p> <p>土壌作り</p> <p>①土壌消毒 ②堆肥等の梳きこみ ③サブソーラー引き、耕耘</p> <p>*サブソーラー：2本の爪足がある農具、トラクターの後ろにセットして畑で引くと深く耕することができる。その後耕耘すると深い層でふかふかの土壌ができる</p> 	<p>○土壌消毒：D-C油剤(D-D剤) 使用時期は作付の10～15日前 使用日：3月12日 (農薬使用1回)</p>	<p>(土壌消毒: )D-C油剤(D-D97%) 線虫防除、コガネムシ類幼虫防除 土壌処理(土壌中に注入)、ガス化して拡散、効率的に防除する。平成22年11月劇物指定 30cm間隔、深さ15cmに注入しすぐに覆土する</p>
<p>(3) 植付け、藁敷き 4月～5月</p>	<p>5月18日藁敷き</p>  <p>5月14日一部種芋植え</p> 	<p>○燻炭・堆肥散布：4月11日 堆肥：馬糞や米ぬか、魚粉等をミックスしたものに光合成細菌を加え発酵させたもの</p> <p>○種芋植え付け：4月13日～20日 一部5月14日</p> <p>○肥料散布：5月8日、14日</p> <p>①80%有機ペレット状の肥料 1袋20kg入りを6.5袋使用(130kg) 内、窒素系化学肥料:2.08kg</p> <p>②鶏糞：120kg</p> <p>○藁敷き：5月18日</p>	<p>(光合成細菌の機能) 有機質肥料や堆肥が土壌微生物により分解される際に生成される作物の養分吸収阻害物質を分解・減化する働きがあり、土壌病害の予防や作物の品質向上に効果がある</p> <p>(稲藁を敷く目的) ①除草剤不使用の栽培。雑草の発芽、大和芋の成長妨害を防除する ②雨水の跳ね返りが葉・茎の病気原因となる確率を低くする。 ③土壌の保湿性を高め土壌中の温度変化を小さくす ⇒気象の変化の影響度を低くする。</p>

栽培の手順	作業内容	肥料・農薬等使用履歴	備 考
<p>(4)野生動物対策 野兔が畑に侵入、若い蔓芽を食ベル被害があるので今年もフェンスを張り巡らす</p> <p>(5)草取り、葉茎の消毒作業 6月～9月 草取りは猛暑・少雨に関係なく、10日に一度は必要だった</p> <p>葉茎に病気(葉渋病あるいは炭疽病)が疑がわれるときは消毒液を散布した</p> <p>8月は10日間隔で草取り。例年より生育が早いように感じる。暑さにバテる。</p> <p>(6)大和芋の成長 9月～10月 葉や蔓は成長を止め、栄養分は芋に集中。ソフトな土壌が保たれていれば形のいい大和芋になります</p>	<p>従来の被害 (蔓の先が食いちぎられる)</p>  <p>(野兔の糞)</p>  <p>(稲藁に残っていた稲)</p>  <p>(下葉の陰に勢力を広げ)</p> <p>丁寧に根を残さないように引き抜く。花が咲く前に駆除できればいいのだが。</p> <p>草取りは、病気発見の大事な機会になる</p>  <p>(花が咲く草は根こそぎ)</p>  <p>収穫前に葉茎を刈り取る (11月)</p> <p>刈り取った後のいきいき畑</p>	<p>○消毒剤 : Zボルドーを散布 使用日 : 7月2日、8月11日</p> <p>(目的)葉渋病(糸状菌)、炭疽病(黴)の殺菌 有機JAS規格適合により、農薬使用回数にカウントされない</p> <p>(参考) ボルドー液は、硫酸銅と生石灰を主成分とする農薬だが、有機JAS規格適合により、農薬使用回数にはカウントされない。また、収穫前使用制限や使用回数制限はない</p> <p>○殺菌剤 : アミスター20 使用日 : 7月21日 (目的)葉渋病、炭疽病 病原菌が作物に侵入する前の予防効果 侵入した病原菌を制御する治療効果 (農薬使用回数2回)</p> <p>○消毒剤 : Zボルドーを散布 使用日 : 8月11日</p> <p>○殺菌剤 : ストロビーフロアブル 使用日 : 9月2日 (目的)葉渋病 (農薬使用回数3回)</p>	<p>*畑を荒らすのは野兔だけではない。アライグマや狸も出没する。</p> <p>☆昨年からのフェンス高く張り巡らしている。以前のような被害はなくなった。</p> <p>(参考) *ボルドー液の由来 : 1885年フランス・ボルドー地方で、葡萄泥棒防止のために葡萄に着色する薬剤としてボルドー大学の教授が開発。その後殺菌効果が認められ農薬として使用されることになった。</p> <p>10月～11月に、一般生活者が「むかご」収集を行った</p>

栽培の手順	作業内容	肥料・農薬等使用履歴	備 考
<p>(7)収穫 12月7日(日) いきいき畑の大和芋 収穫祭</p> <p>いきいき畑の大和芋 は12月中に全量収 穫予定</p>	<p>通常の収穫作業</p>  <p>大和芋が有る所 を掘り起こし</p>  <p>土の中から拾いだ し、収集して行く</p>  <p>収穫が終わった いきいき畑</p>	<div data-bbox="1048 794 1854 1169" style="border: 2px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <p><b>「まいべえ」2014年産の記録</b></p> <p>化学合成農薬の使用回数 <b>3 回</b> (千葉エコ農産物使用上限 11回)</p> <p>化学肥料(窒素成分) <b>2.08kg</b> (千葉エコ農産物使用上限 10.5kg)</p> </div>	<p>☆12月7日は、佐倉・でんぱた舎のイベントとして 収穫体験を行った。古来からある手掘り作業で収穫 畑でやまと芋をいろいろな食べ方で実食</p> <div data-bbox="1451 531 2069 730" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>☆農作物個別に使用が認められている農薬151品 の残留検査を、いきいき畑の大和芋にも行った。 「まいべえ」は総ての農薬について「不検出」。 使用していない、他から飛来汚染もないことが証明</p> </div>